



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

運を引き寄せる

法音寺では「堪忍」といえば村上先生、村上先生といえは「堪忍」というぐらい、村上先生は堪忍の教えを如説修行された方です。その村上先生が最も堪忍されたのが杉山先生ご遷化の時です。法音寺の前身である仏教感化救済会がこの先どうなるかという時でした。

杉山家の代表という人が救済会に突然やってきました。すぎやま先生の子、杉山辰造氏です。辰造氏は「救済会の財産はすべて杉山辰子の個人名義であるので杉山家でこれを相続する。速やかに引き渡すように」と主張しました。

ここに至って初めて村上先生は、困苦する人々を救うことに全力を尽くしてきたものの、救済会を維持するための



方策を何も考えてこなかったことに気づかされたのです。
救済会を思ふ人々は、「法律に依って救済会の安泰を計
ってはどうか」と村上先生に種々進言をしました。しかし、
村上先生は「今、冷たき法律に依って事態を処置したなら
ば、私の三十年來にわたって修養してきた堪忍の徳もたち
まち水泡に帰するのである。必ずやこれは、諸天善神が私
を試験されているのだ」と言われました。要するに、裁
判は喧嘩と同じであり堪忍破りである、ということでした。
村上先生は相手に寛容な態度を示し、会員の方々にも堪
忍を誓っていただき、一年間程かけて交渉をされ、最終的
に辰造氏は主張を取り下げました。そして仏教感化救済会
は財団法人大乘報恩会となり、その役員の一人として杉山
辰造氏が入ることになりました。村上先生は昭和8年のご
法話で次のように言っておられます。

「もし腹立つようなことがあったならば、前会長（杉山先



生）から教えられた甲斐もないのだと思って、皆さんにも私の心情を申し上げるとともに、前会長の遺訓をお話しいたしました。皆さんは私の心を了解せられて、互いに力を合わせよく尽くしてくださいました。もしその時、間違いが起こったならば、この会は解散してしまっただけかもしれません。しかるに今日、本会の組織を法人に改めるよう準備を進め、認可もすでに目睫に迫っている有様で、各支部は次第に増加し、会員も昭和七年頃の十倍にもなったことは、全く皆さんが前会長の遺訓を守って、ただご法のために真心をもって努力くださったと同時に、前会長のご守護の賜ものと、深く感謝する次第であります」

『遺教経』にある次の言葉は村上先生を指しているような気がします。

「忍の徳たること、持戒苦行も及ぶあたわざる所なり、よ



く忍（にんぎよう）を行（な）ずるものはすなわち名（な）けて有（う）りき大人（だいにん）となす」

大阪（おおさか）在住（ざいじゅう）の弁（べん）護（ご）士（し）さんで西（にし）中（なか）務（む）さんという方（かた）がおられま
す。『ベテラン弁（べん）護（ご）士（し）の「争（あらそ）わない生（い）き方（かた）」が道（みち）を拓（ひら）く』
という本（ほん）を出（だ）されています。その中（なか）で次（つぎ）のよう（よう）に述（の）べられ
ています。

「話（はな）し合（あ）いで解（かい）決（けつ）しないから裁（さい）判（ばん）をするわけですが、裁（さい）判（ばん）
をしな（な）く（な）て済（す）むならそれ以（い）上（じょう）のこ（こ）とはあ（あ）りま（ま）せん。争（あらそ）え（え）ば
争（あらそ）う程（ほど）心（こころ）がす（す）さんで（で）き（き）ま（ま）す。また、身（み）体（たい）にもよ（よ）くあ（あ）りま（ま）せ
ん。本（ほん）来（らい）は争（あらそ）いと無（む）縁（えん）の日（ひ）々（じつ）を送（おく）る方（かた）が幸（しあ）せな（な）の（の）です（す）から。
争（あらそ）わず（ず）に和（わ）解（かい）で解（かい）決（けつ）すると相（そう）談（だん）者（しゃ）が幸（しあ）せにな（な）るケ（け）ース（す）が実（じつ）
に多（おほ）い（い）の（の）です（す）」

西（にし）中（なか）さん（さん）はよ（よ）く「不（ふ）思（し）議（ぎ）な弁（べん）護（ご）士（し）さん（さん）で（で）す（す）ね（ね）」と（と）言（い）わ（わ）れ
る（る）そ（そ）う（う）です（す）。そ（そ）んな（んな）西（にし）中（なか）さん（さん）も（も）、元（もと）々（ごと）は裁（さい）判（ばん）で（で）の勝（しょう）利（り）を（を）め
ざ（ざ）す普（ふ）通（つう）の弁（べん）護（ご）士（し）さん（さん）で（で）した（した）。それ（それ）が特（とく）別（べつ）な経（けい）験（けん）を（を）して生（い）



き方が変わったそうです。西中さんは「私は過去に三人、人を殺しました」と言われます。「決して鉄砲で撃ったとか、包丁で刺したりしたのではありません。しかし、遺族としてみれば、鉄砲や包丁で殺されたのと同じ気持ちだったと思います」

弁護士になって間もない頃、ある人から借金の取り立てを依頼され、西中さんは相手に内容証明郵便を送って、取り立ての電話をして執拗に請求し続けました。すると、その相手は「西中弁護士に返済の猶予をお願いしたが認めてもらえなかった」という遺書を残して自殺してしまいました。

次は裁判で嘘ばかりつく証人でした。裁判の中で西中さんはそれをどんどん追及したのです。すると、その人は裁判中に心筋梗塞で倒れ、数日後に亡くなってしまいました。三人目は同和地区の人でした。「娘との結婚に相手の周



りの人が反対はんたいをしている。どうにかならないか」という相談そうだんでした。西中にしなかさんがお母かあさんと娘むすめさんの話はなしを丁寧ていねいに聞いているうちに夕方ゆうがた6時頃じゅうごになりました。お母かあさんが「西中さん、どうぞ召めし上があってください」と天てんぶらを揚あげてくれました。西中にしなかさんはお腹なかが空すいていなかったなので「結構けっこうです。もう失礼しつれいしますから」と断ことわって帰かえったそうです。すると、お母かあさんが数日すうじつ後に「私は弁護士べんごしさんからも差別さべつされた」と遺書いしよを残のこして自殺じさつしてしまいました。

西中にしなかさんは差別さべつなど一切いっさいしていません。本当ほんとうにお腹なかが空すいていなかったただけなのです。しかし、ひどい差別さべつを受けてきた方はそういう受け止め方かたをしてしまったのです。

これらの経験けいけんが、その後の西中にしなかさんの弁護士べんごし人生じんせいを変かえました。それから弱よわい人ひとのその立場たちばに立たって弁護士活べんごしかつ動どうをするぐという信念しんねんで長年ながねんやってこられたのです。



また、西中さんに大きな影響を与えた人物がいます。和島岩吉弁護士です。西中さんは若い頃にこの人のもとで四年間仕事をされたそうです。和島弁護士は極東国際軍事裁判（東京裁判）に携わった人です。その人から「西中君、僕の事務所には他の事務所で断られた人が最後に頼み込んでくるから、事情をよく聞いてあげてくれよ」と言われたそうです。

非常に印象に残っているのが、ある自治体で議長を務めている人からの相談でした。その人は小さな工務店に自宅の修理を依頼しましたが、仕上がりが気に入らなかったため、代金を支払わなかったのです。そして裁判になりました。裁判では議長さんが勝ち、お金を払わなくて済んだのですが、直ぐに工務店の社長さんが控訴をしたのです。そこで、和島弁護士に相談にきたのです。和島弁護士は書類を見るなり「君、払ってあげなさい。工事したことは間違



いないやろ。君みたいなカネも名誉も地位もある人間が、弱い立場の人間と争ってどうするんだ」と一喝され、議長さんは「和島先生がおっしゃるならそうします」と一件落着だったそうです。これを見て、西中さんは、和島先生のように弱きを助ける弁護士にならないといけないな、と思われたそうです。

ある時、交通事故に遭ってむち打ち症になった男性が相談にきました。「むち打ち症が辛くて普段の生活も苦しく、仕事もできない。交通事故の賠償金だけでは気が済まない。裁判をやってもっとお金を取ってやりたい」と言うのです。それに対して西中さんは、この人は身体も辛そうだけど、精神的に参ってきている。これは絶対に裁判を止めさせたほうがよい、と感じたそうです。「和解しましょう。裁判はいいことないですよ」と説得して、その男性は結局、小額の和解金を受け取って裁判をすることを止めました。す



とその男性は体調が良くなったのです。よくある話だそうですね。うち打ち症は追突されてなるのですが、精神的な要因も大きいそうです。精神的な負担がなくなると、症状が改善するということがよくあるそうです。逆に精神的な負担が増えていくと、うつ病になることもあるそうです。その男性は「和解して本当に良かったです。心が楽になりました。うち打ち症も知らない間に治ってしまいました。ありがとうございます」と言ったそうです。

西中さんによると、交通事故に遭った時に、一円でも多くとってやろうと考える人は大金が入った後に必ずその金額以上の大金を失ったり、トラブルを起こして大きな損失を出したり、また身体を壊したりすることがよくあるといます。

また交通事故以外にも、商取引の裁判で勝って喜んでいたら後で会社が倒産したり、不渡り手形をつかまされたり、



経営者が交通事故に遭ったりする例を西中さんは数々見てきたといひます。どうしてそうなるか。西中さんは「怨み」だと言われます。私もそう思ひます。裁判に勝つゝということは、相手が負けるゝということだす。負けた人は怨みます。たとえ相手が死んだとしても怨みは残ります。あの世からでも恨んできます。隙あらば引きずりおろしてやろう。会社を倒産させてやろう。病気にしてやろう。という風にです。裁判に勝つても、そういう怨念に引張られるのです。だから西中さんの言われるように絶対に争わない方がいいのです。

西中さんは『万人の人生を見たベテラン弁護士が教える「運が良くなる生き方」』という二冊目の本の最初にこう書かれています。

「依頼者は延べ一万人を超える。一万人もの人生を見てきた私にはわかるのですが、世の中には確かに運の良い人と



悪い人がいます。例えば運の悪い人は同じようなトラブルに何度も見舞われます。トラブルで私の事務所に来て、裁判で決着がついた。ところが同じ人がまた同様のトラブルで私に相談に来るのです。そうやって何度も何度も争い事を繰り返す人は本当に多いものです。私は不思議でなりませんでした。やはり運が悪いのでしょうか言えない。かと思えば全く逆の人もあります。別にトラブルというのではなく、商売に関連した法律相談のために事務所に來るのですが、やはり何度も繰り返し事務所に行らっしゃる。そして、来るたびに会社は大きくなっているのです。こちらは運が良いとしか言いようがありません。一万人という膨大な数の依頼者を見ているうち、私には運の良い人と運の悪い人の見わけが簡単につくようになってしまいました」

運の良い人と悪い人の違いがこの本にまとめられています。



運の良^よい人の例^{れい}を紹介^{しょうかい}します。ある大^{おお}きなスーパ^なーの中^{なか}で精^{せい}肉^{にく}店^{てん}を営^いんでい^いる人^{ひと}が西^{にし}中^{なか}さん^{さん}に相^{そう}談^{だん}に來^きました。その人^{ひと}はあ^ある日^ひ、スーパ^なーのオ^おーナ^なーから「新^{あら}しい店^{みせ}が入^{はい}るから出^でて行^いってほ^いしい」と言^いわれま^した。その当^{とう}時^じ若^{わか}かつた西^{にし}中^{なか}さん^{さん}がそれ^{それ}を聞^きいて、「こ^それは損^{そん}害^{がい}賠^{ばい}償^{しょう}を請^{せい}求^{きゅう}で^きますよ」と言^いうと、その人^{ひと}は「長^{なが}い間^{あいだ}お世^せ話^わにな^なってき^きたオ^おーナ^なーに後^{うし}ろ足^{あし}で砂^{すな}をか^かけるよ^ようなこ^ことはし^したくあ^ありま^ません。た^ただこ^この先^{さき}ど^うし^したら良^よい^いかを相^{そう}談^{だん}に來^きたの^のです」と言^いいま^ました。そ^その後^ご、そ^その人^{ひと}がど^どう^うし^したか^かとい^いうと、き^きれい^{れい}に掃^{そう}除^じを^をし^して、入^{はい}る前^{まえ}と^と同^{おな}じ状^{じょう}態^{たい}に^にし、オ^おーナ^なーに^に丁^{てい}寧^{ねい}にお^お礼^{れい}を^を言^いって出^でた^たそ^そう^うです。す^するとオ^おーナ^なーが「突^{とつ}然^{ぜん}で申^{もう}し訳^{わけ}な^なかつ^た」と、も^もつと条^{じょう}件^{けん}の良^よい新^{あら}しい出^{しゅ}店^{てん}場^ば所^{しょ}を紹^{しょう}介^{かい}し^してく^くれ^れた^たそ^そう^うです。新^{あら}しい場^ば所^{しょ}で商^{しょう}売^{ばい}は大^{たい}変^{へん}繁^{はん}盛^{じよう}し、も^もう一^{てん}店^{ぽう}舗^だ出^だそ^そう^うとい^いうこ^こにな^なつ^つた^た時^{とき}、以^い前^{ぜん}のオ^おーナ^なーから「ま^もた戻^{もど}ってき^きてく^くれ^れな^ない^いか」と連^{れん}絡^{らく}が^が入^{はい}り、元^{もと}



の場所^{ばしょ}に二店舗^{てんぽめ}目^めを出^だしたところ、どちらも大繁盛^{だいはんじょう}したそうです。争^{あらそ}わないと運^{うん}はどんどん良^よくなっていくということです。

この本^{ほん}の中に「運^{うん}を運^{はこ}んでくるのは人^{ひと}です。ですから人^{ひと}との付き合^あいを大事^{だいじ}にすることが運^{うん}を開^{ひら}きます」とあります。人^{ひと}と人^{ひと}をつなげるものは「言葉^{ことば}」です。特に思^{おも}いやりのある言葉^{ことば}、励^{はげ}ましの言葉^{ことば}、ほめ言葉^{ことば}などです。

西中^{にしなか}さん自身^{じしん}の日々^{ひび}の実践^{じっせん}を紹介^{しょうかい}します。毎朝^{まいあさ}、駅^{えき}まで自転車^{じてんしゃ}で行^いかれるそうです。そして、自転車^{じてんしゃ}置き場^{おきば}に自転車^{じてん}車を停^とめられます。そこで自転車^{じてんしゃ}の整理^{せいり}をしているおじさんに「おじさん、ご苦労^{くわろう}さんやね。ありがとうね」といつも声をかけるそうです。するとある時^{とき}、そのおじさん^{おじさん}が手紙^{てがみ}をくれました。「再就職^{さいしゅうしょく}先^{さき}として自転車^{じてんしゃ}置き場^{おきば}に世話^{せわ}になっ^なっております。声をかけていただいたのは西中^{にしなか}さんが初^{はじ}めてです。こんなうれしいことはありませんでした」とい



う手紙^{てがみ}でした。

出張^{しゅつちやう}でホテルに泊^とまる時の話^{はなし}です。最近^{さいきん}は部屋^{へや}を掃除^{そうじ}した人のメッセージカードがよく置^おいてありますが、「私はこの部屋^{へや}の掃除^{そうじ}係^{けい}です。心^{こゝろ}を込^こめて掃除^{そうじ}をさせていただきます。〇〇」と書^かいたカードが置^おいてあると、西中^{にしなか}さんはそのカードの余白^{よはく}に「〇〇様^{さま}。ありがとうございます。」お陰^{かげ}で快適^{かいてき}に過^すごすことができました。西中^{にしなか}務^む」と書^かかれるそうです。

自分^{じぶん}の勤^{つと}めている事務所^{じむしょ}のあるビルに資源^{しげん}回収^{かいしゅう}のトラックが来^きていると、必^{かなら}ず「ご苦勞^{くろう}さま。ありがとうございます」と声をかけられています。街頭^{がいとう}でチラシ配^{くば}りをしている人^{ひと}がいますと、必^{かなら}ず「ありがとう」と言^いって手^てに取^とるそうです。

事務所^{じむしょ}のビルに入^{はい}ると警備員^{けいびいん}さんが必^{かなら}ずいます。警備員^{けいびいん}さんにも必^{かなら}ず大^{おほ}きな声^{こゑ}で「ご苦勞^{くろう}さま」と声をかけられているそうです。



この話から私はデール・カーネギーの『人を動かす』の中の話の思い出しました。

デール・カーネギーは大勢の実業家を集めて講習会を開催していました。その実業家達に「目を覚ましている間は毎時間一回ずつ誰かに向かって笑顔を見せることを一週間続け、その結果を講習会で発表しよう」と提案をしました。それがどういふ結果を見せたか。デール・カーネギーは一つの例を挙げています。

ニューヨークの株式場外仲買人、ウィリアム・スタインハートさんの手記です。デール・カーネギーは「この手記は別段珍しいものではなく、同様の例は数えきれない程ある」と言っています。

その手記にはこうあります。

「私は結婚して十八年以上になるが、朝起きてから勤めに
出かけるまでの間に笑顔を妻に見せたことがなく、また二



十語としゃべったためしもない。世間にも珍しい程の気難し屋でした。カーネギー先生が『笑顔について経験を發表せよ』と言われたので、試みに一週間だけやってみる氣になりました。その翌朝、頭髮の手入れをしながら鏡に映っている自分の不機嫌な顔に言い聞かせました。『おい。今日はそのしかめっ面をよすんだぞ。笑顔を見せるんだ。さあ、早速やるんだ』。朝の食卓に着く時、妻に『おはよう』と言いながら、ニツコリ笑って見せました。『相手はびっくりするかもしれない』と先生は言われましたが、妻の反応は予想以上で、非常なショックを受けたようです。『これからは毎日こうするんだから、そのつもりでいるように』と妻に言いましたが、事実、今では二カ月間それが続いています。私が態度を変えてからのこの二カ月間、かつて味わったことがない大きな幸福が私達の家庭に訪れています。今では毎朝出勤する時、アパートのエレベーター



ボーイに笑顔で『おはよう』と声をかけ、門番にも笑顔で挨拶するようにしました。地下鉄の窓口で釣銭をもらう時も同様。取引所でも、これまで私の笑顔を見たこともない人達に笑顔を見せます。その内に皆が笑顔を返すようになりしました。苦情や不満を持ち込んでくる人にも明るい態度で接します。相手の言い分に耳を傾けながら笑顔忘れずにようにすると問題の解決もずっと容易になります。笑顔のお陰で収入もうんと増えてきました。私はもう一人の仲買人と共同で事務所を使用しています。彼の使っている事務員の一人に好感の持てる青年がいます。笑顔の効き目に気を良くした私は先日、その青年に人間関係について私の新しい考えを話しました。すると彼は私を初めて見た時はひどい気難し屋だと思ったが、最近ではすっかり見直していると言ってくれました。私の笑顔には人情味があふれているそうです。また私は人の悪口を言わないこと



にしました。悪口を言う代わりにほめることにしています。
自分の望むことについては何も言わず、もっぱら他人の立場に身を置いて物事を考えるように努めています。そうすると、生活に文字通り革命的な変化が起こりました。私は以前とはすっかり違った人間になり、収入も増え、交友にも恵まれた幸福な人間になりました。人間としてこれ以上の幸福は望めないと思っています」

誰しもスタインハートさんのように、運を良くしたい。幸福になりたいかと思っっています。
その鍵は日常の行いにあるのです。

次号に続く

